外国にルーツをもつ子どもの指導・支援リーフレット

子どもたちの**今**と**未来**をつなぐ指導・支援を進めるために

1. 子どもに寄り添う
- 子どもを取り巻く状況を理解する
- 生活言語と学習言語
- 子どもと保護者の声

2. 関係者と連携する
- 子どもを支えるチームの一員として
- 県内の支援団体

3. 情報を集める（リンク集）
- 帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策
- 諸外国の教育制度
- 日本語指導のためのカリキュラム・教材

公益財団法人 しまね国際センター

http://www.sic-info.org/

3. 情報を集める（リンク集）

帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策

学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1341903.htm
「特別の教育課程」による日本語指導についての情報が掲載されています。

外国人児童生徒受入れの手引き
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm
外国人児童生徒の公立学校への円滑な受入れを進めるための資料が掲載されています。

諸外国の教育制度など

世界の学校を見てみよう（キッズ外務省）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/

日本語指導のためのカリキュラム・教材

外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
学校において児童生徒の日本語の能力を把握し、その後の指導方針を検討する際の参考とするためのものです。

学校教育における JSL カリキュラム（小学校編）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm

学校教育における JSL カリキュラム（中学校編）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm

情報検索サイト「かすたねっと」
http://www.casta-net.jp
多言語教材や多言語学校関係文書の検索ができます。

Shimane International Center

公益財団法人 しまね国際センター

子どもの教育支援　http://www.sic-info.org/support/childs-education/
島根県内の日本語教室　http://www.sic-info.org/support/learn-japanese/japanese-class/

本所
〒690-0011
島根県松江市東津田町369番地1
TEL　0852-31-5056
FAX　0852-31-5055
MAIL　admin@sic-info.org

西部支所
〒697-0016 島根県浜田市野原町2433-2
公立大学法人島根県立大学内
TEL　0855-28-7990
FAX　0855-28-7991
MAIL　hamada@sic-info.org

このリーフレットは、一般財団法人自治体国際化協会の
平成27年度多文化まちづくり促進事業助成金により作成されました。

2. 関係者と連携する

子どもを支えるチームの一員として

外国にルーツをもつ子どもを支援するには、ことばや教科学習の面だけでなく、不安やストレスを抱えた子どもへの寄り添い、エンパワメント（主体的に生きるための力づけ）も重要です。そのため、指導・支援は学校が主体となって、校内体制を整え、地域の支援団体とも連携しながらチームで進めることが大切です。

支援員の立場からは、自分自身もそのチームの一員であるという自覚をもって、ひとりで抱え込まず、常に担任とコミュニケーションを取り、情報を共有することが大切です。自分から子どもの様子を伝えたり、困ったことがあれば相談したりすることによって、チーム全体でいろいろな情報が共有され、より充実した支援につながります。

子どもにとっても、たくさんの人と関わりをもち、その支えの中で育まれていくことが、未来へ向けての原動力になるということを意識しておきましょう。

県内の支援団体

しまね子ども日本語教育協会 " しまねっ子 "＜松江市＞

［代表者］　宮川 澄子　　［連絡先］　TEL:0852-21-2023（事務局長：大沢 よお子）

「外国にルーツをもつ子ども」への日本語教育の充実と環境整備に取り組んでいます。主たる活動は、松江市内の小･中学校に在籍する外国人児童･生徒の日本語学習支援です。学校に出向き、子どもたちに寄り添いながら、先生方や保護者らとの連携を密にし、基礎的な日本語指導を行っています。また、教科学習に入りやすくするための教材開発や経験豊富な外部講師を招いた公開研修・勉強会を企画し、研鑽に努めています。

NPO 法人エスペランサ＜出雲市＞

［代表者］　江角 秀人　　［連絡先］　TEL:090-3714-1892 / E-mail:tabkyo-p@sky.plala.or.jp

ことばや文化のちがいにかかわらず、誰もが安心して暮らせるまち―「多文化共生のまち」をめざし、日本語教室、異文化理解講座、外国にルーツをもつ子どものための母語教室、多文化共生に関する学習会などを行なっています。2015 年 4 月からは、企業、行政、市民との協力・連携のもと、「いずも多文化こどもプロジェクト」を展開、放課後教室や親子イベントなど、外国にルーツをもつ親と子の「安心の場」づくりに取り組んでいます。

UNNAN 多文化まちづくりカフェ＜雲南市＞

［代表者］　芝 由紀子　　［連絡先］　TEL:090-8061-1454

〈みんなが楽しいまちづくり〉を合言葉に、雲南市在住の外国出身者の方と「異文化理解教室」や「外国にルーツをもつ親子の交流活動」を行っています。また、島根県から「外国人地域サポーター」を委嘱され、通訳・翻訳、生活・日本語教育面でのサポートを行っています。保護者の方から「同じ国出身のお母さんと交流したい」「子育てや子どもの学校生活について話したい」といった要望があれば是非ご紹介ください。

1. 子どもに寄り添う

子どもを取り巻く状況を理解する

外国にルーツをもつ子どもの背景は、実に多様です。同じ年齢、同じ国から来た子どもでも、来日した時期、家庭内で使っている言語、育ってきた環境、学習経験などは、一人ひとり異なっています。

例えば、目の前にフィリピンから転入した 10 歳の児童が 3 人いるとします。A さんは、フィリピン国籍の母親が日本人の夫と再婚したことに伴い、このたびフィリピンから呼び寄せられました。B さんは、A さん同様母親の再婚により半年前に来日、今までは別の小学校に通っていて、引っ越しにより転校してきました。C さんは、日本人の父親とフィリピン人の母親の間に生まれた日本国籍の児童で、5 歳までは日本で育てられ、その後事情があって 5 年間母親のフィリピンの実家に預けられていましたが、このたび帰国してきました。

このような個別の背景を多面的に捉えることにより、子どもへの理解が深まり、つまづきの原因を読み解いたり、興味・関心を高める日本語指導の工夫をしたりできるようになり、一人ひとりに寄り添った指導・支援を考えることができます。

また、日本の外国人受入制度や、ルーツのある国の事情など、該当の子どもが今ここにいる制度的・社会的背景について知っておくことも大切です。

「生活言語」と「学習言語」

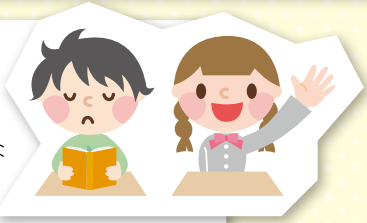
外国にルーツをもつ子どもが日常生活の中で流暢に日本語を使っているのを見ると、もう大丈夫と思うかもしれません。しかし、教科の知識や概念を表すことばには、日常生活ではあまり使わないことばがあります。例えば、学習活動の中では「この人の気持ちは…」ではなく「登場人物の心情は…」のように同じような意味でも日常生活では耳慣れない表現がたくさん使われています。「しかく」は分かっても「正方形」「長方形」は分からない、「はな」「くさ」が「植物」に結びつかないという子どもも多くいます。

日常生活で使う「生活言語」は比較的短期間でも身につくとされていますが、授業や抽象的な学習のための「学習言語」を理解して運用できるようになるには、長期間、体系的な学習が必要とされています。

坂本ダニカさん
（大学生、大阪府在住）
※中学1年生の時、
フィリピンから来日

子どもと保護者の声

島根県内の小・中学校で学んだ子どもや、現在学校のことを聞きました。目の前にいる子どもや保護の成長を思い描き、指導・支援のあり方を考える際



Q1 日本の学校に来て驚いたことは？

A1 授業中、先生の質問に対してシーンとするじゃないですか。フィリピンでは、みんなすぐに手をあげて答えます。日本では、みんなが無言で、分かっているのか分かっていないのか、よく分かりません。黙っているのはいいこと？私は手をあげて答えていたから、悪いことしてないのに目立ってしまって、友だちから「この子、ウザイなあ」って思われていたと思います。

フィリピンでは落第の制度があるけど、日本はないでしょう。私、日本語が分かっていないから勉強もできなかったのに、学年が上がってびっくりしました。

Q2 困ったことは？

A2 日本語です。中でも漢字と敬語。漢字は読めるようになっても、なかなか正確に書けません。今も、大変です。敬語は、尊敬だとか謙譲だとかあって、どう使っていいのか分からなくて困りました。

Q3 将来の夢は？

A3 心理学を勉強して、臨床心理士など心の専門家になりたいです。

「いじめ」で自殺をする生徒もいるでしょう。私自身も辛い思いをしたから、少しでも助けになりたいと思ったので。

インタビュアーより

日本語指導をしていると、言語や価値観・文化の違いから「友だちから仲間外れにされる、無視される」などの悩みを打ち明けられることがあります。日本語指導や学習支援だけでなく、子どもの精神的なケアの充実と、「違い」が差別やいじめにつながらないよう、周囲の大人や子どもたちへ多様性を受け入れることができるような積極的な働きかけが大切です。

学 んでいる子どもの保護者に、日本の学
護 者の姿とも重ね合わせながら、子ども
際 の参考にしてください。

ソノハタ・ファビアナさん
（2人の子ども〈小学生、中学生〉の母親、出雲市在住）※1994年から8年間日本に滞在。2014年11月に、ブラジルから再来日

Q1 日本の学校に来て驚いたことは？

A1 体育の授業や、運動会、子どもが学校のそうじをすることなど、ブラジルにはないことがたくさんあります。特に驚いたのは学校のルール。とてもきびしいと思います。そうじについては、日本の学校教育では生活面の学習も重視されていることを知らずに、子どもがすることを良く思わない親もいるようです。もともと金髪の子が黒く染めるように言われた、と友人から聞いたときにはびっくりしました。

Q2 困ったことは？

A2 まず言葉です。毎日、学校からたくさんのお便りがあり、全部を読むのはとても大変。自分の子どもの学校では、ふりがなをつけてくれたり、大事なものは翻訳してくれるけど、それがないところは本当に大変だと思います。それから、子どもたちは学校でいやなことをされることがあるようです。なかなか「やめて」と言えないようで、そんなときには先生のサポートがほしいです。

Q3 子どもの将来に期待することは？

A3 子どもたちには、日本で大学まで行ってほしいです。親は工場の仕事でもいいけど、子どもにはちがう仕事、自分がやりたい仕事をしてほしい。ポルトガル語と日本語の他にも、いろんな言葉を勉強してほしい。そうすれば、どこでも仕事ができて、いろんなチャンスがあると思います。でも現実には、日本で高校、大学に行くのはとても難しいと感じます。特に中学生の子どものことが心配。受験のための特別なサポートがあればありがたいです。

インタビュアーより

保護者もまた、異文化の中での子育て・教育にとまどいや不安を感じています。来日の理由、仕事、家庭環境といった個別の事情や、文化・習慣、制度など、それぞれの保護者・家庭の背景に丁寧に目を向けながら、一人ひとりの子どもの将来を見据えたサポートが必要です。また、子どもや保護者が納得できるように対応することが大切です。